かたつむりごっこが拡がる・繋がる

－1歳半の節目を充実させるごっこあそび－

園名　朱い実保育園

氏名　門田　慧

１・２歳混合クラスでのかたつむりになりきるごっこ遊びの実践記録です。年度初めにかたつむりごっこを子どもたちに持ち掛けた保育者でしたが、子どもたちはかたつむりのイメージがありませんでした。そこで、本物のかたつむりを探す散歩にでかけることになりました。小さな生き物にも出会いながら、かたつむりのイメージで遊びました。かたつむりを見つけた子どもたちはかたつむりのイメージをいっぱい拡げて遊ぶ姿がありました。生活の中でもかたつむりのイメージを持ってちょっと頑張ったり、友だちと繋がるきっかけになったりしていました。

また、丁寧に見ていきたい子の気持ちに寄り添いながら保育計画を進めていくことを大切にしてきました。気持ちの表出が不安定になりやすい１歳半の発達の節目をごっこあそびを充実させることで力強く乗り越えていく姿がありました。個の分かりやすさと安心を保障していくことは、クラス全体の心地よい生活に繋がっていきました。

かたつむりごっこが拡がる・繋がる－１歳半の節目を充実させるごっこあそび－

朱い実保育園　　門田　慧

保育園の概要

朱い実保育園は京都市左京区にある定員 120 名の保育園です。吉田山や鴨川など四季を感じながら自然の中で身体を動かせる場所も散歩先として身近な距離にあります。神社などの文化的な施設も近いので、遊びに行くと子どもたちは好奇心を掻き立てられるようです。園庭の中にも樹々や草花、数種類の果物の樹木があり、その周りに生息する生き物との触れ合いも大切にしています。

１．はじめに

本実践記録は１・２歳混合クラスで一年を通してごっこあそびを子どもたちと楽しんできた過程になります。乳児保育において保育者の関わりによって遊びが変化・発展する事例が幼児保育よりも多い[i]ことから、保育者としての意図やねらいを整理しつつ、保育者の関わりと子どもの姿を明らかにします。

乳児でのごっこあそびを設定する上で大切にしてきたことは、個々の自我の膨らみに着目することでした。子どもの様子からその子の気持ちや状態を思い図り、心地よい生活環境になることを目指してきました。特に気持ちの不安定さが表出するとされる１歳半の節目[ii]をごっこあそびを通して豊かにしていく姿がありました。

２．本実践クラスの様子　生活の安定と安心を目指して

本実践クラスは１・２歳混合クラス（１歳児 10 人、２歳児４人）を正規職員３人で担当しています。本園では１歳と２歳の子どもたちの発達要求に応じて細やかに保育することを目指し、１・２歳児を月齢順に三分割（2 歳児高月齢クラス 18 人、２歳児低月齢と１歳児高月齢クラス 14 人、１歳児低月齢クラス 12 人）してクラス編成をしています。

本クラスは前年度からの持ち上がりの職員がいなかったため、子どもたちのことをとにかく知らなければいけないという思いから、年度当初は 14 人の子どもを大人３人で一斉に見る生活をしていました。しかし、新入園児や新しいクラスでの環境の変化にドキドキしている園児もおり、かみつきが頻発してなかなか落ち着かない様子でした。そこで、保育者との安定した関係を支えに、周りの友だちに関心を向け、友だちの活動を見て、一緒に活動できるためには小さな集団が必要[iii]と考え、14 人を３つの小グループに分けて小さな集団を編成することにしました。グループ内のメンバーも担当する職員も固定しました。メンバーは一日の生活を踏まえながら、体力や子ども同士の関係性を重視して決めました。

小グループの担当制に切り替えてからの生活は友だちの存在を意識するように心がけてきました。例えば「おはよう」と呼ばれる朝の会での手遊びの場面です。新入園児のＴくんはドキドキしてジッと私を見つめたまま動かない様子でした。そこでまずは在園の子どもたちとあっぷっぷの手遊びを何度も繰り返して遊びました。初めは私の顔を見て笑っていた子どもたちでしたが、「〇〇くんの顔いいね！」と声をかけているうちに、子ども同士であっぷっぷの顔を見合うようになりました。その様子を見ていたＴくんも次第に笑顔が見えるようになり、自分から「あっぷっぷ！」と気合の入った顔を見せてくれました。その時の周りの友だちが「わははは！」と大笑いする雰囲気が一緒に楽しんでいることを感じさせてくれました。か

みつきも小グループに移行後はグッと減り、安心できる保育者と友だちを心の拠り所にしながら落ち着いて生活できるようになりました。

１歳児にとって「この子は何してるかな？」と友だちの事に目を向けるのにちょうどよい集団の大きさだったように思います。友だちの事が気になるし、友だちに気にしてもらえる関係がとても心地よい小集団でした。また、保育者にとっても子ども一人ひとりの様子に細やかに目を配れることはとてもメリットとして感じました。子どもの隣にじっくりいられることで、ちょっとした表情の変化や気持ちの揺れ動きをキャッチすることができました。

運動・食事・睡眠など生活面ではまだまだ月齢差や個人差も大きい乳児クラスです。心地よい生活サイクルと信頼関係に根差した生活づくりがまずは保育の土台にありました。

３．子どもたちと楽しむかたつむりごっこ

＜かたつむりってなに？の子どもたち＞

私自身に「ごっこあそびを楽しみたい」という思いはあったのですが、何を題材にしたらよいのか悩みました。子どもの興味を追いかけようにも、１歳児の興味は刻々と移り変わっていきます。虫を追いかけていたかと思うと、水を出したり、葉っぱを拾ったり…そんな好奇心旺盛な姿にこれをやりたい！という題材を決められずにいました。そうしている内に、前述したような小集団での生活を進めていくようになりました。私が担当する 4 人の様子も少しずつ落ち着いてきて、私自身もごっこ遊びの題材をいよいよ決めて、子どもたちに持ち掛けてみようかなと思えるようになっていました。

そこで、まずは小集団の中でごっこあそびを始めてみることにしました。子どもたちと楽しみたいと考えたごっこあそびは「かたつむりごっこ」です。題材自体は「かたつむりになりきると可愛いかも！？」と私の面白がりからの着想でした。もともと私は製作が好きなので、かたつむりごっこのきっかけとしてかたつむりになりきる帽子作りから始めてみました。

＜エピソード１＞　かたつむりの帽子

私が教材棚からかたつむりの帽子の材料を探していると、まずはＫくんが「なに（してるの）？」と興味津々で声をかけてきます。興味がこちらに向かってきたので、一緒に製作できそう！と思って、材料を揃えました。すると、他の３人もその様子が気になって集まってきました。シール貼りは何度も楽しんでいた活動だったので、4 人は楽しそうに紙皿にぺたぺたとシールを貼っていきました。最後に、その紙皿にモールとスポンジで飛び出た目を２つ付けると…かたつむり帽子が完成！さっそく私が「みてみて！かたつむりだよ！」と帽子を被って見せると、あんな興味津々だったＫくんは「んー。（なーんだ、それはいいわ。）」と言い残し、子どもたちは即解散してしまいました。私は、帽子を作ればごっこあそびを子どもたちが楽しんでくれると期待していた分、そっけない反応にがっかり。

気を取り直して作ったかたつむり帽子を被ったまま、他グループの他児にもアピールしましたが、やっぱり全くピンと来てない様子でした。その日の休憩時間に、事務所で「かたつむり帽子に子どもの反応が薄くて…」という話をしました。すると、他職員から「それじゃ、なめくじやもんな。」と一言。肝心の殻が無いことに気付き、次は段ボールで私が背中に背負う大きな殻を作る事にしました。幅 50 ㎝ほどのかたつむりの殻を作り、それを背負って午睡から起きた子どもたちの前に「でんでんむしだよ！」と登場しました。ここまでなりきったのだからきっと喜んでくれるはず…と思っていたのですが、やっぱり子どもたちの反応は「カドちゃん（私の呼び名）何してるんだ？」とお目目をパチクリしています。

かたつむりのなりきりごっこに興味が集まるはずという想定とは違う子どもたちの反応について担任間で話してみました。「かたつむりって絵本（絵本『ぴょーん』[iv]）では見たことあるけど、実際には見たことがないからかな？」という話になり、「本物のかたつむり」を見つけることを目標に散歩に行くことしました。全体の生活が落ち着いてきて、ちょうど全員で歩いて園外に散歩に行きたいなと考えていた時期でした。園舎裏のあじさいを行き先に決めてクラス全員でのかたつむり探しの散歩がスタートしました。

＜かたつむり探しの散歩へ＞

目的地であるあじさいに着くと必ず全員で楽しんだやりとりがあります。地面に腰を降ろして葉っぱを見上げながら保育者と一緒にかたつむりを探しました。私が「かたつむり、どーこだ？」と探す素振りをすると、子どもたちは「いないね～。」と首をかしげます。保育者も子どもも“いない”ことさえ楽しむやりとりです。「どーこだ？」「いないね～。」のやりとりは日々の散歩の中で子どもたちに拡がっていきました。

＜エピソード２＞　かたつむりのかくれんぼ

いつものようにかたつむりを探していると、Ｙくんが友だちの中から離れていきます。どうしたのかな？と行く先を目で追ってみると、背の低いモミジの中に入り込んでこちらに視線を送ります。嬉しそうに陰にじっとしている姿を見て、Ｙくんはかたつむりのように隠れているのでは！？と思い、私が「あれ～？Ｙくんど～こだ？」と言いながら探す真似をしました。すると、子どもたちも「どこだ？どこだ？」と周りをキョロキョロします。友だちが探してくれているのを見て、隠れていたＹくんは思わず「ば～！」とみんなの前に飛び出してきます。探していた子たちは「いた～！」と大笑いしました。

その後は、色々な子が代わる代わる隠れ始め、「どーこだ？」と言いながら探し、みんなで隠れている所までよーいどん！で走り出すというかくれんぼごっこになっていきました。かたつむり探しの「どーこだ？」からかくれんぼごっこに展開していくこととなり、散歩先での楽しみがまたひとつ増えました。

散歩が子どもたちの中でも楽しみになっており、晴れた日には必ずかたつむりを探しに行きました。大人も子どもも必死で探していましたが、なかなかかたつむりは見つかりません。けれど、葉っぱの裏、土の上や道路の段差などをよーく見ていると、小さな生き物に沢山出会うことができました。

＜エピソード３＞　かたつむりのおともだち⁉

かたつむりを探していると、Ｍちゃんが気になったのは三角コーンの先にある工事用の警告灯でした。三角コーンから引っこ抜いてこちらに嬉しそうに見せてくれます。「なになに？」と保育者が警告灯の筒の中を覗き込むと…10 匹以上のナメクジがウヨウヨ。保育者は「ぎゃ！それかたつむりちゃう！」と悲鳴を上げましたが、Ｍちゃんは一瞬身構えた後にニマ～と笑ってナメクジをつんつん…嬉しそうにナメクジに触れていました。周りの子もＭちゃんの見つけた生き物が気になるようで、集まってくる友だちに「どーぞ。」と見せてあげていました。隣でＨちゃんもツンツンと触って「ぬるぬる～。」と言いながら、２人で新しい生き物との出会いにワクワクを共有しているようでした。

あじさいの周りにはナメクジの他に、クモやアリ、小さな虫も沢山いて子どもたちは小さな生き物に目をキラキラさせながら見入っていました。子どもたちが昆虫などの生き物に心躍らせる姿を見て、このまま散歩を楽しんで続けていきたいと担任間で確かめ合ったのでした。

６月に入り、散歩先のいつものあじさいの前でついに保育者の「あ！いたー！」という大きな声が響きます。子どもたちが「なになに？」と集まってきて、もう一度みんなでいつもの「かたつむりさん、どーこだ！」をして、じーっと葉っぱの上を探しました。まだ殻も柔らかい小さい小さいカタツムリでしたが、ちょこんと葉っぱの上にいるかたつむりの姿に、「いた！いた！いた！」と子どもも保育者も一緒に大興奮。赤ちゃんかたつむりだったので、私の指に乗せて子どもたちは輪になって座り、じっくりとかたつむりの様子を一緒に観察しました。

＜エピソード４＞　かたつむりとの出会い

まずは私が馴染みのかたつむりの歌を歌いながら「おまえのめだまはどこにある～♪」と一緒におめめを探しました。じーっと見ているとおめめが出てきて R ちゃんは「おめめここー！」と大発見！子どもたちは代わる代わる顔を近づけてながら小さなかたつむりを見ていました。初めましてのかたつむりにおそるおそるですが、おめめを触るときゅっと引っ込み「おめめ無くなったね！」とかたつむりの不思議な姿に大盛り上がり！普段は園庭のアリを強く握りつぶしてしまう I ちゃんもこの時は息をのみながらそ～っと優しくかたつむりの殻を触ってくれていました。

生き物が苦手な子ももちろんいるのですが、「かたつむりってどんなの？」という気持ちで輪の後ろからちょっとのぞき込んでいました。みんなの盛り上がりに一歩下がった M ちゃんも言葉はありませんでしたが、私の肩を掴みながらじーっと見つめていました。

かたつむりは虫かごに入れて保育室にお迎えしました。飼育は子どもたちにもお願いしようと思い、給食室に野菜をもらいに行くことが毎朝の日課になりました。給食室の窓（子どもたちから様子が見えるように大ホールに面している）をトントンとノックして「ご飯ください！」と手を伸ばします。給食の先生に「誰のごはん？」と聞かれ、「でんでんむし！」と答えて人参の皮をもらいます。給食室に顔を出す子どもたちの姿は、「私たちのかたつむりさんをお世話してるの！」という気持ちが溢れていました。

＜生活の中で拡がるかたつむりごっこ＞

かたつむり探しの散歩を通してかたつむりに存分に心をときめかせた子どもたちにとって、以前は反応の薄かったかたつむり帽子もかたつむりになりきれるとっても魅力的なものになりました。かたつむり帽子に加えて、子どもが背負うことのできるかたつむりの殻リュックも子どもたちと一緒に作りました。新聞紙をビリビリとちぎって感覚あそびを楽しんだのち、カラービニール袋に新聞紙を詰めてかたつむりの殻に見立てたかたつむりリュックです。お気に入りの人たちは、部屋の中でも園庭でも必ずと言っていいほどかたつむり帽子とリュックを身につけて遊んでいました。

＜エピソード５＞　私もあなたもかたつむりだね！

かたつむりに変身して園庭に出ると、まずはかたつむりの動きをしながら人差し指でおめめを作ってゆっくり歩きだす H ちゃんと M くん。H ちゃんが「でんでんむしむし～♪」と歌うと M くんも振り返って、お互いにかたつむりに変身しているのを確認するように顔を見合わせてニコニコ。帽子についている目玉を一緒にフリフリして「おめめ～！！」と笑っていました。滑り台まで行くとゆっくりとした動きで登ったり滑ったりしながら、2 人は「かたつむりだよー。」と私に教えてくれます。

かたつむり帽子を身につけて「私もあなたもかたつむりね！」とお互いに面白がりながらかたつむりごっこをしていました。ゆっくりした動きの真似っこもどんどん上手になっていきました。なりきりごっこや前述（EP２）したかくれんぼごっこを楽しみながら、「わたしかた

つむりなのよ！」とイメージを持って、かたつむりになりきるごっこあそびを自分たちの遊びにしていきました。生活の中でもかたつむりのイメージが膨らんでいることを感じた場面がありました。

＜エピソード６＞　かたつむりの「むしゃむしゃ」

Ｋくんが人参のクッションを持って来て、かたつむりになりきって「むしゃむしゃ。」と言いながら食べる真似を始めます。毎朝のエサやりで、かたつむりが人参の皮を食べている場面をよく観察しているので、Ｋくんも腹ばいになってかたつむりそっくりにモソモソ食べる真似をしました。そんなＫくんのかたつむりになりきる様子に私も「いれて～。」と腹ばいになるとＫくんもニッコリ。私とＫくんの二人でむしゃむしゃごっこをしていると、周りの子も集まってきて人参クッションを囲んでかたつむりごっこで楽しみました。

＜エピソード７＞　僕たちも「むしゃむしゃ」

野菜クッションをムシャムシャするかたつむりごっこあそびを楽しんだ後日、給食で人参の含め煮が出てきました。人参がちょっと苦手なＭちゃんは「いらない！」と食べるのを拒否。私は「無理して食べなくてもいいか。」と思い様子を見ていると、むしゃむしゃごっこ発案者のＫくんが「見ててー、むしゃむしゃするよ。」と言って人参をパクリ。私は「かたつむりと一緒だね！」と部屋にいるかたつむりと交互に見ながら驚いた反応をしました。Ｋくんは親指を立てて「ぐー！」と満足そう。そのやりとりを見ていたＭちゃんも「カドちゃん、みてて。」と人参を一口食べました。今まで人参を食べている姿を見たことが無かったので驚いている私をよそに、結局人参を完食したのでした。

私がＭちゃんの頑張る姿を褒めると、嬉しそうにニコーっと笑って向かいに座っているＫくんと顔を見合わせているのがとても印象的でした。同じかたつむりのイメージを持ちながら、一緒にかたつむりのように「むしゃむしゃ」するのがとても心地良い時間でした。かたつむりのイメージを力にちょっと頑張ったりできる２歳児前半の姿でした。

＜かたつむりごっこで友だちと繋がる＞

かたつむりごっこを本格的に楽しみ始めた７月に入ってからは、自我もどんどん大きくなり、友だちと「イッショが楽しい」[v]という場面がグッと増えてきました。その「イッショに」を感じながら遊べる仕組みとしてかたつむりの帽子とリュックはとても良いモノになっていたと感じます。そう感じた場面として、Ｔくんの姿があります。

＜エピソード８＞　イッショにかたつむりしよう

Ｔくんはかたつむりのことは興味があるようでしたが、かたつむりごっこが始まるとぴゅーっと走り出して行ってしまいます。ある時、仲の良いＡくんがかたつむり帽子を被って「一緒に遊ぼう！」という気持ちでＴくんに笑顔を向けてくれました。すると、それまで被り物は断固「いやや。」と言っていたＴくんが「かたつむりする。」と私に伝えてくれました。かたつむり帽子をしたい気持ちが叶うと二人で嬉しそうにはしゃいでいました。

目に見える形でモノ（今回はかたつむり帽子とリュック）を媒介に共通の楽しさを感じながら「イッショに」遊ぶことが叶った瞬間でした。ごっこあそびが得意でよく友だちと集まって遊ぶ子はもちろんのこと、かたつむりのイメージで遊ぶのが苦手な子でも「かたつむりになりきる」ことが視覚的に分かりやすい様子でした。

色々な「楽しい！」を共有していったことで、楽しみ方は子どもによってそれぞれだけど「みんなで一緒にかたつむりごっこって楽しいね。」という雰囲気がとてもステキでした。かたつむり帽子を身につけるのが嬉しい子、歌うのが楽しい子、言葉あそびにハマる子、身体を動

かすのに夢中な子、そんな周りの友だちを見てワクワクしている子などなど…色んな楽しみ方でかたつむりに心を寄せてごっこあそびがクラス一人ひとりを繋いでいました。

４．１歳半の節目を充実させるごっこ遊び　Mちゃんの姿を通して

年度当初から丁寧に見ていきたいなと考えていたのはMちゃんの様子でした。４月の時点では一歳半を過ぎ「ジブンデ！」という気持ちはグングンと大きくなっていました。その一方で、語彙が少なく発語もはっきりしていませんでした。そのため、M ちゃん自身から何かを伝えようとしてくれても、その発語から気持ちを十分にくみ取ってあげられず、子ども同士だと尚更気持ちが分かってもらえない！といった状況でした。気持ちの面でもすっきりと気持ちを出せない様子で、そのモヤモヤとした気持ちが癇癪の形で現れ、ひっくり返って泣きわめくことが多かったので、もっと心地よく過ごせたらいいのになと考えていました。

M ちゃんについて前半期の手立てとして、安心できる大人と一緒にMちゃんが好きな遊びを見つけて存分に楽しむことを目指しました。まずは M ちゃんの視線を辿りつつ拙い言葉と表現から気持ちを汲み取ることからです。その結果、M ちゃんの気持ちには「（友だちの使ってる）アレで遊んでみたい！」があることを再確認しました。その気持ちを上手に表せなくて元々の気持ちも分からなくなるくらいぐちゃぐちゃになってしまう様子がありました。そこで、やりたいことを満足させていく中で、せっかくの関わりたいという思いを心地よい関係に繋げてあげたいというのが保育者の願いでした。

かたつむりごっこあそびの展開を考えるうえで、そんな M ちゃんの様子は常に頭にありました。前述（EP３）したように、かたつむりを見つける散歩の中で嬉しそうに笑っている M ちゃんの姿を見て生き物と関わりながら遊びを楽しむことを続けていきたいと思いました。実際にかたつむりを見つけた時も M ちゃんは最初はびっくりしていたものの、周りの友だちの反応とかたつむりを交互にじーっと見ながら気持ちを寄せてくれていました。大切なかたつむりを同じ目線で友だちと見る時間は、M ちゃんにとって心穏やかに繋がりが持てる時間にもなっていきました。

かたつむりに心ときめかせたMちゃんは間違いなく「かたつむりが好き！」になりました。なりきりごっこも好きだったようで、かたつむり帽子とリュックが大のお気に入りです。

＜エピソード９＞　気持ちを言葉にする経験

園庭に面しているベランダにかたつむり変身セットを置いてあるのですが、園庭に出る度に「ん！（かたつむりごっこがしたい！）」とかたつむりリュックを指さしながら保育者に伝えます。私が「かたつむり（のリュック）欲しいの？」と聞くと、M ちゃんは「うん。」と答えてくれたので、かたつむりリュックを渡してあげます。言葉を使ったそのやりとりを園庭に出る度に毎日続けました。すると、「ん！」から「かたつむり！」になり、やがて「かたつむりちょうだい！」と上手に言葉で伝えられるようになっていきました。

まずはやりたい気持ちを大人に言葉にしてもらい、それを実現できることの繰り返しの中で気持ちを言葉にすることを獲得していきました。好きなことをやりたい！と頑張って伝えることで少しずつ大きくなっていく姿を見ているととても嬉しかったです。かたつむりをきっかけに気持ちを伝えることが嬉しいと分かったMちゃんは、給食や制作など積極的に「やりたい」気持ちを伝えようとする姿が見られるようになりました。言葉で伝えることが少し難しくて上手に伝えられないことがあっても、あきらめずに身振りや表情で伝えようとしてくれる姿は泣いて主張していた以前の様子とは全く違っていました。

また、大人に対してだけではなく友だち同士の関わりでもＭちゃんの姿が変わったなと感じた場面がありました。

＜エピソード 10＞　友だちに気持ちが伝わった！

子どもたち 3 人がしている焼き芋ごっこを少し遠くで見ていたＭちゃんは「いいなー。私もしたいな。」という思いで近づいてサッとおいもクッションに手を伸ばしました。すると、すかさずＡくんが「あかん！」と怒って使っていることを主張します。年度初めだったら相手の強い言葉に「いやだ！」と泣いて主張していたのですが、その時はぐっとこらえてじーっとＡくんの顔を見ていました。Ｍちゃんの様子を隣で見ていた私は、そのタイミングで「じゃあ、一緒に貸してって聞いてみようか？」とＭちゃんに声をかけると「貸して。」と小さい声で気持ちを言葉にして伝えることが出来ました。Ａくんも「どうぞ。」とおいもクッションを貸してくれて、Ｍちゃんはニコーっと笑っておいもクッションを受け取りました。4 人で焼き芋ごっこが再開され、みんなでもぐもぐ…とごっこあそびを楽しんでいました。

年度当初は不安定な気持ちの Ｍ ちゃんでしたが、大好きなごっこあそびを通して自分の思いを伝えたり、大人とも子どもとも「イッショが楽しい！」で関わり合った経験がＭちゃんの中に積み重なっています。Ｍちゃんの好きな遊びが充実できたことは、一歳半のグッと伸びる手前の不安定な節目を力強く越えていく力になったと感じています。

５．保育者としての私自身の目標

一年を通してかたつむりのごっこあそびを楽しんできた背景には、私自身の反省と目標がありました。本実践時は保育士歴４年目だったので何か提案・計画したいという気持ちもあり、年度初めにどういう保育をしたいかな…と考えていました。そして「私自身もあそびを楽しむ！」という目標を立てました。この目標を立てたのには今までの保育経験から大きく２つの反省が心に残っているからでした。

１つ目の反省は、０歳児クラスの担任だった時のことです。保育者１年目での０歳児保育に戸惑うことばかりでした。子どもからの会話はほとんどないし、ハイハイで動き回ったり、突然泣き出したりする子どもたちとどのように遊んだらよいか分からず、長い一日をただただ過ごす毎日でした。正直な気持ちとしては、子どもは可愛いけれど保育ってあまりおもしろくないな…と思っていました。そんな私に先輩の保育者から言われた「子どもともっと話したらいいのに。」という一言が今も印象に残っています。その言葉を聞いた時は０歳児と話すってどういうこと？会話もまだできないのに。と思いました。振り返ると、保育者である私が子どもと言葉でのやりとりを楽しんでいなかったんだなと思います。子どもにとっても大人に身の回りの世話をしてもらうことだけでなく、言葉でのやりとりが「これが気持ちいいってことなんだ。」とか「この人となら安心する。」といった心地よい生活に繋がっていました。

２つ目の反省は、保育者３年目の５歳児クラス担任の時のことです。初めての幼児クラスということに気負いすぎて「先生としてちゃんとしなきゃいけない…」とガチガチでした。生活発表会の劇の取り組みで絵本「はなびのひ」[vi]をやることになり、子どもたちでその場面を遊びながら内容を考えていくことになりました。私は子ども５人とかるわざしの場面を考えることになったのですが、「まずはセリフと動きを覚えさせて…」と子どもにプレッシャーをかけるだけになってしまいました。楽しさが全く見えない中で子どもたちが取り組みに前向きになれないのも当然です。そんな空気を一変させたのは、全体で練習するようになっ

た時に相方の保育者が言った「それおもしろいやん！」の一言でした。かるわざしのイメージから絵本「じごくのそうべえ」[vii]のように「ぺぺんぺんぺん」と前に出てきた子にすかさず「それおもしろいやん！」と笑いました。他の子もそれに続いて前に出てくると周りで見ていた友だちも大笑い。それ以降、お客さんがワクワクするにはどうしたらいいかな、とか劇に前向きになっていきました。ココ！という場面で子どもたちの気持ちを盛り上げる言葉をかけることはやっぱり難しいな…と感じます。しかし、その取り組みの何が面白いかを考えながら保育者の自分も一緒に楽しむことはできるのでは？と思うようになりました。

以上２つの経験から、自分も楽しみながら何ができるかな？と思い、乳児クラスの過去の実践記録（年２回園内で行われる研修会資料）を参考にしました。その実践記録にはイメージを共有しながら動物やお話の主人公になりきってごっこあそびをする子どもたちの姿がありました。初めての１・２歳児クラス担任だったので、どんな遊びがどのように盛り上がるのかがほとんど想像がつかないままだったのですが、とにかく「ごっこあそびを一緒に楽しんでみよう！」という思いで、保育計画を担任間で相談しながら本実践の日々が始まったのでした。

６．おわりに

かたつむりのごっこあそびを振り返った際、子どもの興味関心から保育を計画することが出来なかったのではないかと感じていました。本実践記録として保育者の意図と子どもの姿を整理したことで、子どもたちと相互にやり取りをしながら保育を展開してきたことを再確認しました。かたつむりというテーマ自体は私の発信からでしたが、生き物について知りたい気持ちやごっこ遊びを通じて友だちと繋がりたい姿をその都度キャッチしながら「楽しい！」を追求していくことが出来ました。

１・２歳児クラスにおいて、突然ごっこあそびが始まるわけではありません。まずは大人の真似を経て、生活経験の再現あそびから始まります。そして、本実践のように生き物を探して歩き、発見・観察したこと…自身の経験の土台があってこそ、ごっこあそび（虚構と想像の物語[viii]）を存分に楽しめるのだと身をもって知ることが出来ました。本実践を進めていく上でこだわってきたことは「本物に触れる」ということです。絵本の中のイメージだけでなく「本物」のかたつむりとの出会いを大切にしてきました。＜EP10＞に登場するおいもクッションも実際にツルから育て、ツルを全員で引っ張って収穫し、煙の匂いや熱を感じながら目の前で焚き火をして焼き芋を味わいました。「本物」のかたつむりや焼き芋にこだわったからこそ、経験に裏付けされたイメージが子どもたちの中で拡がっていきました。そして、子どもも大人も全員が同じ目線で「本物」に対して驚いたり感動したりできたことは、ごっこあそびが根付く保育をつくるうえでとても大きな原動力になっていました。

保育計画を立て方針を定めていく上で、丁寧に見ていきたい子の存在は大きいです。今回はＭちゃんの自我の膨らみと１歳半の発達の節目に着目して、担任間で保育の展開を考えました。大好きなごっこあそびで生活を充実できたことはＭちゃんにとって大きな糧となりました。さらに、Ｍちゃんの安定を目指すことは他児を含むクラス全体の分かりやすさや「イッショに」を保障することに繋がりました。

[i] 石川洋子：保育者のふり遊びへの関わり―0～2歳児に焦点を当てて―，教育学部紀要　文教大学教育学部　第55集 p111-121（2021）

[ii] 梅澤啓一：乳幼児期における遊びの発達メカニズム，美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要 Vol.46 p22-35（2001）

[iii] 大阪保育研究所（編）：「子どもと保育1歳児改訂版」かもがわ出版 p177（2011）

[iv] まつおかたつひで：「ぴょーん」ポプラ社（2000）

[v] 加藤繁美・神田英雄：「子どもとつくる1歳児保育」ひとなる書房 p44（2013）

[vi] たしろちさと：「はなびのひ」佼成出版社（2018）

[vii] 田島 征彦：「じごくのそうべえ」童心社（1978）

[viii] 上記viii p12